

先

月の隠岐公演に、小さな子を二人連れて見に来ていたお母さんがいた。その夜、塾宛てにメールがその母親から届いた。子どもが落語にとっても興味をもっており、何とか応援したいのだが、という内容だった。

その少し前にも、松江市内だけでも土日にしか連れて行けない、稽古をしてもらうことはできるでしょうか、という問い合わせがあった。

いずれも断る理由はすぐに浮かべることが出来る。遠隔地ではさすがに無理ですね、とか、やはり面と向かって稽古ができないとなると、などの恣意的な線を引いて。

寄席の依頼も同じように選ばうと思えば選べる。

「経費はいくらみておけばよいですか」とよく聞かれるが、ぼくはここで金額を示してもよいのである。実際に運営にはお金がかかっているのだから。でも、ある金額を言った途端に、さーつと線をひくことになってしまう。その線はくるくると蔓を伸ばして、やがて手足をしばりつけてくる。それが嫌さに「それは主催者にお任せします」とぼくは答える。

問い合わせのあった先の二人は、どちらも今教室生である。直接稽古はできないから、リモートですることにした。三歳と四歳の子なので、五歳の教室生に頼

んだ。家で簡単な小咄を録画して送り、それを見ながらやってみた動画を送り返すという、子ども同士の通信教育である。そうして話を覚えた二人が、ついこの間、寄席に出演した。お客さんは、覚え立てのしかも手本が同じなのだから同じ小咄を一生懸命に演じる二人に笑い、惜しめない拍手を送ってくれた。

ちなみに隠岐の三歳児は、初高座を含む二日間で三つの寄席を本土で行って隠岐に帰った。そして間を置かず、保育士さんたちが企画した凱旋高座に上がり、こどもたちや職員に大受けしたそう。保育園から笑顔いっぱい帰ってきて、すぐに次のネタに挑戦しているというから頼もしい。ぼくもその熱意にこたえるべく、ほかの教室生に手本動画を依頼し、すぐに送った。次の寄席までにはできそうだと連絡があった。

稽古に來られないという子どもたちが、やりようはいくらでもあるよ、と教えてくれたうえに、新しい道を開きつつある。隠岐と本土の子ども同士の交流や高齢者施設への未就学児ユニットでの訪問など。

一人の子を受け入れるということは、その子を通じてそこから先に広がることでもある。新たに人を得るというのはおもしろいことだとつくづく思う。円山亭拳には千人の門弟がいた。応拳は限界など決して設けなかった、ということだろう。

2025.9.29

1508号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

木幡智恵美

51

老い老いに

こ

れまでの書き手に加え、新たな書き手の文章も載せながら、夕焼け通信は十一年目に突入する。詩でお馴染みのM・Aさんは「心」を掘り下げ、さらに補助教材の域としながら皆に配られる「心のノート」について問い続けられた。新顔のK・Kさんは、『海峡を越えて』五十猛物語』のタイトルで寄稿される。朝鮮と日本の関係史を調べている方で、朝鮮半島からの渡来を受け入れた五十猛の歴史が綴られた。

その他、横田で行われたドキュメンタリー映画祭で行われた姫田忠義・土本典昭両監督の対談記録が編集長のテープ起こしによって掲載されている。

そうした中、いつの間にか夕焼け通信は五百号目を迎えていた。気が付いたら達していたという感じだ。三百号が庄巻だったのに比べ、四百に続きこの回もいつもの号と同じように淡々と発行されている。こういうのを軌道に乗ったというのか、当たり前になったというのか。編集後記の文章がそのあたりをうまく表現しているので全文を載せる。

福岡の犬養光博さんは、決して終わっていないカネミ油症事件を告発するために、「月に一度の座り込みを三十年以上続けておられる方です。先日、四百回記念のお誘いが届きました。「雨の日も、嵐の日も、嵐の日も、雪の日も、朝七時から夜七時までの十二時間、カネミ倉庫株式会社の正門前で座り込みを続けてきました。それは無駄な時間であったのか、大切な時間だったのか、本当のところは分かりません。でも、この座り込みがなければ、今のぼくが無いことだけは確かです。」きつとどんな自発的行為も、その背後でいつも「そんなことは無駄」というささやきを聞いているのでしよう。いつそれに屈しても不思議はないのですが、それでも持続しているのは、犬養さんが最後に書かれていることに尽きるような気がします。

週一回、思いを綴る。印刷する。発送する。この繰り返しの中で、信頼できる人々と思いを通わせ、そして出会う。その都度の大きささまざまな心の起伏が私の健康を保つてくれています。偉そうなことは言えませんが、『道楽』なのです。五百号続いたのだから、「道楽」も少しは堂に入ってきたところでしょう。お付き合いいただいているみなさまにあらためて感謝申し上げます。

30代フリーター 移民の制限を主張する右派政党が各国で勢力を伸ばしている。アメリカではトランプに率いられた共和党MAGA派、フランスでは国民連合、ドイツではドイツのための選択肢、日本では参政党……。

年金生活者 それらに共通しているのは、それぞれの国の固有の歴史に根差したアイデンティティーを抛りどころにしてナショナリズムを刺激するのではなく、移民の制限という実利的な理由から排外主義的な主張を掲げている点だ。

参政党の「日本人ファースト」はトランプの「アメリカファースト」の模倣だ。アメリカの労働者が移民に仕事を奪われている。よその国を優遇しすぎてきたせいだ。そんなトランプの主張を日本に当てはめようとしている。

「ファースト」を主張するのは、日本は天皇が統治する神国だからとか、大和魂を持つ日本民族は優れているからとか、といった理由からではない。移民を受け入れれば、日本人は仕事を奪われ、貧しくなるからという利害が

それらはいずれも「帝国」の統治に入った亀裂であり、それをふさぐために動員されたのが「国民国家」に特有のナショナリズムにほかならない。

「帝国」の域外にあって「帝国」を支えてきたものにひび割れが走り、それを「域内」からふさごうとして「同質性」の原理に助けを求めたと言ってもいい。

「帝国」の「多様性」は広い域内に様々な勢力を抱えているところにある。そのぶん程度の差はあれ分権的な統治を強いられ、中央の権力は制約を受ける。それを補うのが、周辺の「服属国」からの忠誠だ。「帝国」はそれをつつかえ棒に国内を統治する。米、中、口の各「帝国」が遭遇する危機は、いずれもこのつつかえ棒の不具合に由来する。

「帝国」と「服属国」の関係は、柄谷行人の交換様式論を借りて言えば、交換様式BⅡ服従と保護（略取と再分配）に相当する。Bは現代では国家と国民の間の富の再分配が主なものだ

主張の根拠になっっている。アイデンティティーではなく、利害にもとづくナショナリズムは国から国へと感染しやすく、グローバル化する。

30代 同じナショナリズムでも、中国共産党の「愛国」と先進諸国の右派政党の「自国第一主義」には違いを感じる。

年金 中国には先進諸国のような「移民問題」がほとんどない。ただ、似たような問題はある。国内の農村から都市へ大量に流入する出稼ぎ労働者「農民工」が労働条件・教育・医療・社会保障などで差別を受けており、彼らはいわば「国内移民」だ。これは、かつて農村を安い労働力の供給元として発展したモノづくり中心の産業資本主義の構造が中国にまだ残っていることを示している。

農民工の問題を放置すれば、彼らと都市住民との間に分断が深まり、社会が不安定化する。それを覆い隠し、国民に「統合」を促す理念として中国共産党が使っているのが「愛国」だ。このことは、「帝国」としての歴史が長

が、「帝国」と「服属国」の関係にも当てはまる。

覇権国家Ⅱ「世界帝国」だった前世紀後半までのアメリカは同盟国という名の「服属国」、すなわちNATO諸国や日本、韓国などに「服従」と「略取」を上回る「保護」と「再分配」を

い中国が西洋列強に半植民地化され、それをね返すために目指した近代的な「国民国家」の建設がまだ途上にあることを物語っている。

30代 「帝国」の原理が「多様性」にあるのに対し、「国民国家」の原理は「同質性」にあり、両者は対照的であるはずなのに、現在は「国民国家」に特有のナショナリズムに傾斜する「帝国」の姿がきわ立っている。トランプの「アメリカを再び偉大な国に」、習近平の「中華民族の偉大な復興」、プーチンの「強いロシア」といったスローガンがそれを象徴する。

年金 そうした「帝国」と「国民国家」のハイブリッドは、それぞれの国が抱える統治の危機を物語っている。アメリカは現在、「世界帝国」すなわち覇権国家の座からずり落ちつつあり、それが統治の危うさを招いている。中国では独立の可能性をほらむ台湾の存在が以前にも増して共産党の支配を脅かしている。ロシアの場合はウクライナが中国にとつての台湾に相当する。

与えることができた。それだけの圧倒的な軍事力と経済力があつた。それを支えたのが第2次産業を牽引車とする産業資本主義だった。

30代 そのおかげで「服属国」の経済は成長した。

年金 他方、アメリカは第3次産業を牽引車とするポスト産業資本主義の段階に移行し、その前の産業資本主義の時代のような高度経済成長を望めなくなった。「保護」と「再分配」が「服従」と「略取」を上回るアンバランスにだんだん耐えられなくなった。

それに不服を唱えたのがトランプの「アメリカファースト」だ。「ファースト」とは、「帝国」として「服属国」の上位に立つことをやめ、対等な関係を建前にして自国の利益を最優先にダイールをすることを意味する。国家間の関係を交換様式BからCⅡ商品交換（貨幣と商品）に転換することと言ってもいい。高関税もDEIに対する敵視も移民の制限もそこから発している。

ニュース日記 985
中村 礼治

最近のナショナリズム